

インクルーシブ色彩学習試論

—色彩配色から学ぶ自己と世界の調和と対話

茂木一司

1. はじめに

本研究は最近の筆者の教育理念である「インクルーシブアート教育」¹⁾を教材レベルで具体化する「インクルーシブアート教材開発」の研究である。「インクルーシブアート教育」とは、今後の共生社会構築に向けて、あらゆる差別を排除し、「差異や多様性を活かすことのできる（広義の）アートを基盤にした社会づくりをすべき」という造語（主張・運動）である。周知のように、インクルーシブ教育とは国連障害者の権利に関する条約第24条（inclusive education system）²⁾に示される障害の有無にかかわらず、すべての子どもが「ともに学ぶ」教育を意味するが、日本においては特別支援教育の中で行われるインクルーシブ教育は近年の特別支援学校数（生徒数）の増加に見られるように分離教育の解消どころかむしろ進んでいるようにも見える。

筆者はこの問題を巨視的な観点から考えることが必要と考えている。科学技術が高度に発達した現代社会は細分化された専門性優先社会であり、それらはもはやつなぎ直すことが難しいほど断片化し、スピード、効率、生産性がさらにそれを加速化し、経済を中心として社会を様々に分断し、生きづらさを増大させている。社会改革は遠回りでも教育からしかできないことを考えるとき、アートのような差異や多様性を前提に、それを活かし、それぞれの個性を調和させながら全体をつかむ統合的総合的な（教育）力が基礎になることこそ重要だと考えた。すなわち「インクルーシブアート教育」とは、アートが持つ人間の尊厳を保つために必要な「自由」を保証するために、現代社会／教育を見直す理念・実践となる提案である。

筆者は、インクルーシブアート題材・教材の理念が個が持つ（身体的、社会的な）特性に合わせて、できること／できないことを持ち寄ってつくる文化的な実践＝社会構成主義的な学びであり、子どもたちは自分の目標に向かって「自分の学び」を自分で作りながら、同時に他者と協調しながらインクルーシブな社会をつくるために対話的で協働的な学び＝アクティブラーニングをすることと定義づけている。したがって、インクルーシブ題材の開発ポイントは「プロセス全体を学習とみなす」、理念としても方法としても「分けないこと」となる。たとえば、視覚障害の場合には見える／見えない、触る／触らないであり、さらに美術教育全体としても表現／鑑賞を分離してしまう。このような二元論的思考は近代を特徴付けるものであるが、

前述のように、「豊かなあいだ」を切り捨てているのに過ぎず、実際には物事は静ではなく動的に捉えること、または能動／受動でなく「中動態」³⁾的に物事を捉えることこそ重要である。

2. 色彩学習の過去・現在と今後の課題

色彩教育／学習は筆者の研究のライフワークの一つでもあり、戦前から続く日本色彩教育研究会⁴⁾を牽引しながら、色彩を学ぶ意味やそれを伝えるための講習会の開催、教材（出版等）開発⁵⁾などを行っている。

本研究ノートでは、跡見学園女子大学の「デザイン基礎実習Ⅰ（入門）」で実践を試みたオンラインを中心として学ぶ色彩ワークショップについて考察する。授業の説明の前に、図工美術教育における色彩教育の現状について補足しておく。色彩教育を歴史的に振り返ると、領域として位置づけられていたのは昭和26年学習指導要領図画工作までで、色名や色相などの基礎知識の学習が昭和52年版まであり、その後は曖昧な扱いで色のイメージを表す学習が残るのみである。それでも平成20年度版から教科の独自性を謳う共通事項によって「形や色などを基に自分なりのイメージを持つ」という文言が学習指導要領に復活し、色彩教育が図工美術教育の主要要素であることが明確化されたことは注目される。しかしながら、（他の領域も同様ではあるが）現在中学校美術教育の色彩教育は絵画教育とデザインの基礎教育、いわゆる構成教育として実際の指導が行われており、色彩理論の学習はせいぜい3時間程度だと言われており、これでは本来の目的の「生活の中で使える生きた色彩学習」とはほど遠い⁶⁾。筆者は、この表面的に色彩理論を学びやり方は非常に問題があると考えている。たとえば、色相環は実際にはつながっている色の世界から代表的な色を選択し円環上に順番に並べたものであることが実感として理解される必要があるが、色相環の図の説明だけではそれは難しい。つまり、筆者の感じる問題点は造形美術教育を通じた色彩学習とは学習者の実際の生（活）の中で生きて働く色彩感覚と一致すること、そのための基礎学習であるべきということである。

3. ワークショップ型色彩学習のポイント

さて、実際の「デザイン基礎実習Ⅰ（入門）」の授業目的と内容について概説する。シラバスにあげた目的は「色彩学習を通して、基礎的な造形感覚や創造的な発想力を学ぶ。構成・基礎デザインの学習から、私たちの生活を豊かにするデザインの哲学や表現技法まで幅広いデザイン概念の基本を実習を通して学ぶ」である。また、授業内容については、「中学校美術科教育の題材・教材研究に必要な色と形などの造形要素やそのリテラシーを具体的な実習を通して学ぶ。今年度は、色彩をテーマにした『表現』と『鑑賞』題材を研究し、最終的にプロジェクト学習を体験する」とした。デザイン基礎を色彩教育にした理由は、①コロナ禍で対面だけで美術（実

技)の授業ができない、②そのために知識を体系的に学習しやすい色彩が適している、③準備する教材もトータルカラー(色紙)とケントブロック(台紙)等といった簡便なものでできるなどであり、本授業が中学校美術科教育の免許科目になっていることも形と色の基礎学習を強調した理由になっている。

それから、ワークショップで色を学ぶことも本授業の特色になっている。インクルーシブ教育としてのワークショップの意味や意義については、いくつかの文章⁷⁾ですでに説明したが、参加協同(型)学習としてのワークショップは知識蓄積型の行動主義学習観ではなく、「学習とは主体的に『意味をつくり出していくプロセス』であり、単なる『知識の転移』ではない⁸⁾」という社会構成主義の学習観に基づいて実践されるところに特色がある。行動主義(実証主義)では現実には独立した世界に存在し、分析によって断片化された知識を白紙の人間にコピーすること、つまり学習における知識の量的な蓄積度を問題にするのに対して、社会構成主義では「学びの意味と自分との関わりを構成していく過程を『状況に埋め込まれた活動』としてとらえ…言語を媒介とする道具的な思考を基本とし、対人的なコミュニケーションとともに自己ないコミュニケーション過程を通して、社会に参加していくことそのものが学習である⁹⁾」とする。そこで筆者は「一方的な知識伝達ではなく、参加者の共同による創造的な学びのスタイル」(中野民夫)¹⁰⁾であるワークショップの学びに注目し、同時にアートをそのメディアとして使用することの意義を強調してきた。その理由には、非常に強い同調圧力によって社会を構築する日本社会にあってワークショップは対抗的な学び=学校化社会へのアンチテーゼになると考えるからである。つまり、個人の自由を基礎とするアートの学びと他者との関係性の中で社会と自己との調和を図る双方向のコミュニケーションの学びとしてのワークショップが合致する学びの場づくりがどうしても必要と考えたのである。今までの40年間に及ぶ美術教員養成の経験の中で、入学してくる学生が正しい答えを求めて、もしくはあると思いついて前進できない姿を目にしてきたが、ワークショップによる学びのアート化は頭だけでなく体全体を使って、まずやってから考えることを優先する創造的な身体をつくれると感じてきた。

このようなことを踏まえ、通常はあまりないワークショップで色彩を学ぶことを最近実践/研究している。その成果として、『しる・みる・つかうシリーズ1 色彩ワークショップ』(日本色研事業、2020)を出版した。詳細は省略するが、本はワークブック形式になっており、日本色研の類似の出版物同様に手張りの色コマが付録している。目次は、①色の原理 色って何?を学ぶ(色相環、PCCSとトーンのしくみ、色が見えるしくみ、加法混色・減法混色)、②色の活用 いろいろな効果や配色を学ぶ(光と色の混色、進出色と後退色・色の感情効果、色の対比現象・色の同化効果、色相とトーンによる配色、色によるプロジェクト学習、環境の色彩)、③色の文化 生活や文化から色を学ぶ(色の分化と多様性、系統色名・固有色名・慣用色名、日本の色・かさねの色目、日本の衣・食の色、色彩の資料室)の全16項目で、左頁に理論的説明、右頁に実践的な内容を配置している。以下の本テキスト

を使用しながら進めた「デザイン基礎実習Ⅰ（入門）」の実習の実際をみてみよう。

4. 令和4年度「デザイン基礎実習Ⅰ（入門）」の授業の実際と分析

令和4年春学期の同科目の受講生は、火曜5時限クラス15名、木曜7名の計22名であった。授業は奇数・偶数が隔週ごとに対面になるハイブリッド方式なので、対面+オンラインのワークショップを同時実施となる複雑な形式である。したがって、オンラインつまり画面越しに発表や表現、対話ができる課題というのがポイントになる。

最初に宿題として、自己紹介カードをつくってもらった。ワークショップでは自分が何者でどういうことをしたい人なのかが重要であるからである（図1）。第1回の授業はガイダンスと自己紹介になる。

2回は、色相環ワークショップである。対面組は自宅から5～10点程度の自分が普段使用している日用品（文具、衣服、化粧品など）を持ち寄って、その場で色相環を製作し、オンライン組は個人で自宅にある物をその場で集めて並べる。この色相環づくりの特徴は、即興であるので、頭よりも身体感覚を使いやすいところにある。参加者は自分が好きだと思っていた色を案外持っていなかったり、非常に偏った色を集めていたりすることに気づく。指導上、気をつけたいのは色相環を埋めるために無理に色探しをしないことで

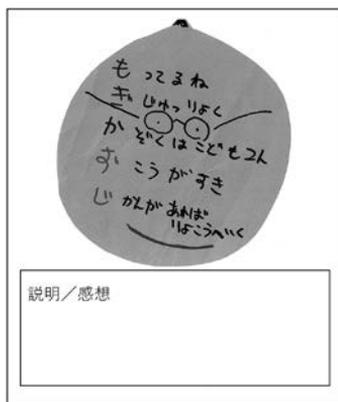


図1 自己紹介カード見本



図2 色彩ワークショップ：テキスト見本・実際の作品（対面・オンライン）

ある。この課題は、生活と色彩の関係を自分事として感じ取れるので、中学校で行われている教科書の図をみるだけの無味乾燥な色相環学習を補うことができる。

次の課題は配色の基本を学ぶためのいわゆる平面構成である。日本色彩研究所が独自に体系化した「PCCS (Practical Color Co-ordinate System: 日本色研配色体系)」を概説し、いわゆる「Hue (色相) + Tone (トーン) システム」と呼ばれる配色調和を目的とした色彩システムを体験的に理解し、さらにアートを／で学ぶ、もしくは表現すること意味、すなわち自己 (個性) と世界 (社会・システム) のせめぎ合いや調和を学ぶことを目的にする。PCCS は色相 (色味) とトーン (明度+彩度の複合概念) によって、従来の三属性=三次元 (色立体) を二次元に還元して感覚的に理解し安くして学ぶ色彩体系であり、文字通り配色を通して調和を学ぶシステムである。配色のルールは、「そろえる (同系・類似) と変化 (中差・対照) の要素の使い分け」が大事であること、つまりそろいすぎていても変化を付けすぎてもダメで「変化の中の統一／統一の中の変化」という矛盾を超えていくレッスンになる。表1はそのことを示したものである。

表1 配色のルール

色相	トーン
それえる	変化をつける
変化をつける	そろえる

- ・配色第1回課題 同系の色相・同系のトーン (色相とトーンの構成は同じに)
- ・配色第2回 類似の色相・類似のトーン (同上)
- ・配色第3回 対照の色相・対照のトーン (同上)

平面構成は100×70mmの黄金比に近い矩形にトータルカラー93B5を切り貼りし、全面を埋める課題で、形 (構成) は自由とする。しかし美術専門でない学生のため

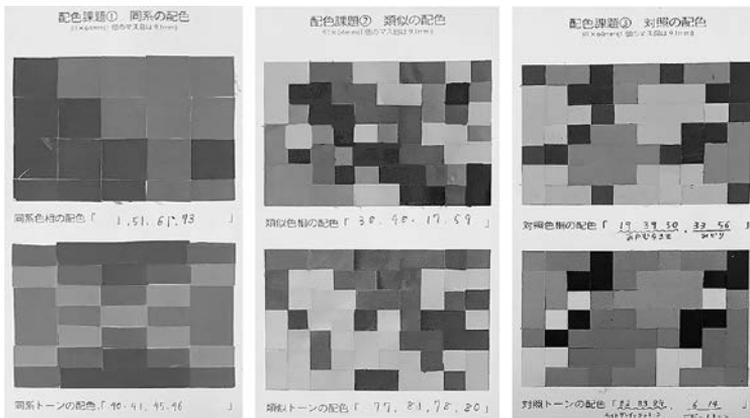


図3 受講生の平面構成作品 (同系・類似・対照)

に画面に部品を配置するのでなく、画面分割して重なりや奥行き、強弱、大小などの対比を考えた構成の方法をすることを最小限度アドバイスしている。

図3では、最初の同系の配色は構成もシメトリーで色紙の貼り方もぎこちないが、類似、対照と進むにつれて、表現が急激に豊かになり、表現に独自性が現れる。ほとんどの学生はたった3回でこのような向上がみられるが、オンラインだけで受講する学生にはやはり真意が伝わりにくく、アートは見えないものを見えるようにする活動であるので、対面でしか伝わらない言葉以上の何かがあることを感じる。

この色彩構成の学習のポイントは、表1の配色のルールで示したように、「ヒュートーンシステム」のルールに従って色選びをすることと限定された色彩空間の中で自分なりの表現力を発揮することにある。色選びの方法は、色相配色の場合には色相表（トータルカラー 93色を系統色名に分類してあげた表）の中から、同系配色だと1色、類似だと3～5色、対照も3～5色程度の色を全部抜き出して、その中からさらに5色程度を選ぶという作業をし、トーン配色の場合にも同様に左のトーン表から、同系1トーン、類似と対照3～5のトーンを抜き出し、5色程度を選び配色する。ゆえに、表現者は「変化の中の統一／統一の中の変化」＝「規範と自由」という矛盾した状態に身を置くことになり、色同士の葛藤や矛盾を止揚する形でどこかで決着を図る必要が出てくる。アートは最終的には自由なので、この時もルールに完全に縛られることはなく、どの程度ルールに従うかという問題にもなる(図4)。

受講生の感想をみるとこの実習の意味がどのようなものかがわかる。

トータルカラー B6判 93色組 567円(本体:540円)

トータルカラー 93色の色相表(4色単位で分類)

トータルカラー B6判 93色組 567円(本体:540円)

トータルカラー 93色の色相表(4色単位で分類)

図4 トータルカラー 93の裏面の色相表とトーン表

「色彩構成」の授業を受けてできるようになったことがある。それは、色彩をトーンや明度、彩度で分け理論的に配色できるようになったことだ。それは、授業内で機械的に配色を行ったことによって身に着けることができた。私は、今まで配色をする際に色を直感で選び、上手く配色ができないことが多かったがこれによって、理論的に配色を行うようになった。その影響で、今まで私の描いた趣味のイラストの配色のどこが悪いのかだんだんわかるようになった。例えば、今まで私は肌の色を塗る際、肌の色だから肌色を塗らなくてはならないと考えていた。しかし、授業で色彩について学んだことによって、肌色を使わなくとも隣接する色との関係で、肌色に見えることが分かった。したがって、私は、肌の色だから肌色を塗らなくてはならないなどの固定観念によって配色をやめ、周りとの色の関係を考え配色を行うようになった。」

ここには、色彩世界のルールにしたがって機械的に色選びをすることが必ずしも思考を固定化させるのではなく、むしろ制限が自由を生み出すこと。さらに色は周りの色に影響を受けて自分の色を決めること、つまり色の相対性を確実に身体化させ学習していることがわかる。

5. まとめ：インクルーシブ色彩教育論に関する補足

この授業の大きな目的は色彩を通して動的な調和を身につけてほしいことである。大学生はこれからの歩みの中でさまざまな世界と対峙する自分があるはずであり、そこには共感者だけでなく、反感者もいれば、無関係・無関心な者もいる。その時々において、自分はどう振る舞えばいいのかに正解はなく、永遠に変化し続ける状況、もしくは関係性だけが存在する。その時表現者として、前に出る必要があったり、後ろに引き下がって考える場面があり、いつの場合にも自分で決めなくてはならないが、それは周囲との調整や彼らのアドバイスで決めることもある。色彩学習が教えてくれるのは「全体をみること」である。いつ、どこで、何を、どうやっていったらいいのか、そしてなぜそれをしなければならないのかを必然的に考えること、こういう練習の繰り返しが色彩構成のレッスンの中にあり、このことは対人関係などを配慮しながら生きることと共通する。

さらに重要なこととしては、色彩は知的な形の学習であると同時に、感覚的で感性的なことである。音色という言葉あるように、色彩は心に直接響き、私たちは色彩世界の中に浸りきることができる。すなわち、色彩学習はあるときは科学的に対象として突き放し、またあるときは芸術的に色の世界に包み込まれ、癒やされたり、逆に戦いの中に引きずり込まれたりもする。色彩学は科学と芸術の総合的な学問であると言われるが、学校を中心とした美術科教育では学習が（自己）表現に偏りがちであり、生きたもしくは生きるための色彩学習という点では十分ではない。色彩から見る世界は人間は調和の中でしか生きていけないことを大いに気づかせてくれるはずである。以下に、学生の感想（気づき）を載せてまとめにかえたい。

「私は、特にデザインに詳しいわけではなく、ただ小さいころから美術が好きで、もっと学んでみたいという理由でこの授業を専攻しました。知識がほぼ何もない状態から始まりましたが、私が思い描いていたよりもデザインは深い世界でした。まず色の名前があんなに細かく分類されていることを知らず、トータルカラー 93 をみて驚きました。そこで色の世界は深いことに気が付き、より興味を持つことができました。ビビットやパールという言葉は聞いたことがあったけど、分類表があることや色相別グループに分けられていることを初めて知ることができました。一つ一つの色の名前はどんな由来で誰が決めたのか気になりました。特に印象に残ったのは、色の響き合いという部分です。色は単色だけでなく、何色かと組み合わせられることで、また違った印象を持たせることができるということを学ぶことができました。例えば黄色一色のイメージだと、フレッシュで明るいイメージがあるけど、周りの色が対照色相と合わせられると、インパクトの強さ、奇抜だという印象を受けました。そのような色の響き合いを学び、最後の方の色彩の作品では活かすことができました。反省点としては、…回数を重ねるうちに上手になっていきましたが、…次はもっとレベルの高いデザインをしようと思っても、考えすぎて逆にわかんなくなってしまうたり、うまく頭の中で整理できずに最初に浮かんだイメージが離れなかったり……一つのイメージが思い浮かぶとそこから離れられなくなるという自分の頭の固さにも気が付きました。どうしても似たり寄ったりの作品になってしまったような気がしました。何かをデザインする上で、いろんな角度からの視点を持つことや、固定概念に縛られずに、発想力を鍛えていくことが大切だと気づきました。このような力を身に付けて、この授業で学んだことを活かしていきたいです。

最近、この授業が活かした場面がありました。先日、成人式の振袖を選びに行ったときに、振袖の布と帯、帯締め、襟などすべての部分の色を重ねながら選んだのですが、色の響き合いの重要性をすごく感じました。全体が同じ色相だとまとまって見えるけどそれだと物足りなく、アクセントも重要で、それをいれるのも周りの色との相性も重要で、色彩構成の授業で学んだことをより深められた気がしました。吸収できていることを実感できてうれしい瞬間でした。この授業を通して、色彩の感じ方の幅が広がったと思います。今まではただきれいな色、美しい色、パステルカラーが好きという感じ方だったけど、今後は色の対比や配色を見て楽しむことができると思いました。絵画やイラストを見る時にも意識することができるし、洋服のコーディネートが一番身近に色彩構成を感じられるのではないかと思います。あとは、一人暮らしをした時に家具を並べる時にも意識できそうだと感じました。この授業で学んだことは今後の人生いろいろなことに活躍する気がします。とても良い経験ができました。」

※今回の報告は、紙面の都合で配色練習の部分だけの考察とする。

註

- 1) 茂木一司代表編集『視覚障害のためのインクルーシブアート学習：理論と教材開発』ジアース教育新社、2021、として主張や実践をまとめた。
- 2) インクルーシブ教育システムとは「人間の多様性の尊重等を強化し、障害者が精神的及び身体的な能力等を可能な最大限度まで発達させ、自由な社会に効果的に参加することを可能にするという目的の下、障害のある者と障害のない者が共に学ぶ仕組みです。そこでは、障害のある者が一般的な教育制度（general education system）から排除されないこと、自己の生活する

地域において初等中等教育の機会が与えられること、個人に必要な「合理的配慮」(reasonable accomodation) が提供されること等が必要とされ」と定義付けされている。国立特別支援教育総合研究所インクル DB 参照 http://inclusive.nise.go.jp/index.php?page_id=40 (2022.12.20)

- 3) 國分功一郎『中動態の世界 意志と責任の考古学』医学書院、2017等を参照。
- 4) 日本色彩教育研究会 HP<http://www.shikikyo.jp/>を参照。同研究会の目的は「広く色彩教育に関する研究を振興し、その普及・発展を図ること」であるが、同会は発足の原点である学校美術教育の中の色彩教育の研究・普及だけでなく、広く民間資格(色彩検定、カラーコーディネーター等)に関わる色彩教育に拡散している。
- 5) 毎年の日本色彩教育研究会による夏期講習校等の開催、及び出版(茂木一司、手塚千尋、夏目奈央子編著『色のまなび事典』星の環会、2015、茂木一司代表編集『色彩ワークショップ』日本色研事業、2020)
- 6) 令和3年発行『美術1』(日本文教出版社)を見ると、「学びを支える資料 色彩」として5頁、三原色(加法・減法混色)、絵の具の混色と重色、三属性と色相環、色の対比、色彩心理などが掲載されているが指導(学習)方法について触れられていない。学習指導要領図画工作科・美術科の変遷に関する参考文献は国立政策研究所データベース <https://erid.nier.go.jp/guideline.html>を参照した。
- 7) ①茂木一司、インクルーシブ教育システム構築のための覚え書き 第2報『群馬大学教育実践研究』34号、2017、pp.57-60、②茂木一司代表編集『視覚障害のためのインクルーシブ学習：基礎理論と教材開発』ジアース教育新社、2019、pp.133-135等を参照。
- 8) 久保田健一、構成主義が投げかける新しい教育『コンピュータ&エデュケーション』15巻、2003、p.12。
- 9) 同上、p.14。
- 10) 中野民夫『ワークショップ』岩波書店、2001を参照。